

# 谷口清先生のご退職にあたって

人間科学部長 益田 勉

令和2(2020)年3月をもって本学部臨床心理学科の谷口清教授が退職されます。谷口教授は、平成17(2005)年4月に本学に赴任され、以来15年間にわたって教育・研究に尽力されました。長い間、お疲れ様でした。私は谷口教授とは専門領域も異なり、先生の業績を紹介する任には不適格であることを懼れますが、先生のこれまでの本学、本学部へのご尽力への感謝の念をこめ、学部を代表して先生のご紹介かたがた先生への御礼を申し述べたいと思います。

谷口先生は秋田大学教育学部で14年間、養護学校教員養成課程で障害児生理学をご担当された後、東京慈恵会医科大学で4年間心理学の教鞭をとられ、平成17(2005)年に本学に赴任されました。以後、本学、本学部で次のような経歴を重ねてこられました。

平成17(2005)年4月 教授採用 人間科学部入試委員(9月まで)

平成17(2005)年10月 人間科学部教務委員(平成21年3月まで)

平成18(2006)年4月 人間科学研究科臨床心理学専攻長(平成21年3月まで)

平成19(2007)年4月 大学審議会委員(平成25年3月まで)

平成20(2008)年4月 人間科学部12号館移転(新棟移転)委員会座長

平成21(2009)年4月 人間科学部教務委員長 越谷校舎教務委員(平成25年3月まで)

平成25(2013)年4月 人間科学部長 学園評議員(平成28年5月まで)

平成29(2017)年4月 人間科学部学生委員(平成31年3月まで)

上記のとおり、人間科学研究科臨床心理学専攻長、大学審議会委員、人間科学部教務委員長、人間科学部長、学園評議員などを歴任されてきました。また、平成20(2008)年4月の12号館開設に際しては、それまで6号館、8号館、13号館に分散していた学部教員の研究室移転業務の中心となって活躍されました。

野島正也学部長(現理事長)のあとを引き継いで学部長に就任、学部長時代の平成26(2014)年から平成28(2016)年にかけては、学部改組という大きなテーマに取り組まれました。その背景には、心理学系志願者数の漸減動向、他学における人間科学系学部学科の設置や改組による競争環境の変化などの要因がありました。特に平成27(2015)年9月に公認心理師法が成立したことにより、心理専門職養成機関としての訴求は喫緊の課題となりました。新学部構想は、何次かにわたる将来構想委員会での議論を経て教授会で検討が進められましたが、全学レベルの新キャンパス構想との輻輳もあり、結局学部教授会は、大規模な改組はしないという方向を選択しました。改組を代替する形でカリキュラム改定が行われ、現在に至っています。私は当時心理学科長としてこの改組の検討に参加していましたが、谷口先生は学部内外の関係者の様々な意見・要望に、本当に真摯に耳を傾け、しかし安易に妥協することなく理想の組織像を追求されていたように思います。平成28(2016)年5月に任期半ばで学部長を退く決断をされた背景にも、学部のあるべき姿についての譲れぬ想いがあったことと拝察いたします。学部の改組見送りの得失はもう少し時間が経たないとはっきりしないと思いますが、私としてはその検討のプロセスは多くの学部教員にとって意味のあるものだったと思っています。

学生指導に関する谷口先生の述懐によると、秋田大学での養護学校教員養成、慈恵医大での医師養成と、目的養成の大学教育を長らくやってきた後の、目的養成ではない本学部への赴任では、いささか戸惑いがあったとのこと。「最初は試行錯誤があったけれど、当時の卒業生がいま現場で頑張っているようなのでそれでよかったのかと思っている」とのことでした。

谷口先生の研究業績については、冒頭でも記したとおり私には十分ご紹介する力がありません。そこで、先生に作っていただいたメモをもとに紹介させていただきます。研究の流れは2つに区分されます。「注意研究を発端とする生理心理学的研究」と「発達障害の早期対応に始まる発達臨床心理学的研究」の2つです。

まず、「注意研究を発端とする生理心理学的研究」ですが、卒業論文の定位反射研究は脳波（基礎律動）の指標としての意味を探る発生機序研究となり、修士論文を経て非線形振動子説の妥当性の検討の議論に結び付き、その後脳波（基礎律動）の発達の検討を通して脳の成熟と障害を論じ博士学位論文となりました。秋田大学に入職後は自閉症に関心を移し、その認知特性の事象関連電位（ERP）研究に進み、自閉症の社会脳成熟の障害を論じ、併せてこの時期、脳波（ERP）と脳機能イメージング（ポジトロンエミッショントモグラフィ＝PET）の同時記録による顔、文字知覚過程研究を行い、1次感覚野と言語野の分析処理の時間関係を明らかにしています。

次に、「発達障害の早期対応に始まる発達臨床心理学的研究」ですが、発達障害の早期対応に関する研究、思考特性に関する研究に始まり、摂食障害、不登校、教育相談、スクールカウンセラー、いじめ等と拡散し、必ずしも十分な議論を蓄積できていないとのことですが、これらの研究を位置付けるべく、『発達臨床心理学——脳・心・社会からの子どもの理解と支援』（遠見書房、2018年）を刊行されました。脳の成熟発達と認知・感情機能の発現の関連の検討は先生の密かな懸案でしたが、2次資料研究にとどまったとのこと。

今年度第37回日本生理心理学会大会を大会長として本学で開催し、大会企画シンポジウム「公認心理師時代の生理心理学——心理学教育の視点から」によって心理臨床家養成の今後の在り方を検討できたのは1と2をつなぐ営みとのこと。

先生は振り返ってこう言います。「私の研究生産性は非常に限定的であるが、心理学については広く経験し、考えることができた。医療・教育を含めて心理臨床の現場に関わり、愛着等の幼児体験の意義を知ったが、それを情動感覚の獲得の問題と理解すると、光駆動反応を手段として脳波発生機序を考えていた頃の引き込みの問題と共通する側面を感じ、システム論的な同型性に驚いている。本質論的見方を鍛えてくれた基礎研究時代に感謝している。一方国民の心の健康に責任を負う心理学の構築にはまだまだ課題が山積していることを痛感している」。

谷口先生、本当に長い間、お疲れ様でございました。そしてありがとうございました。私ども後進のために今後もいろいろ教えてください。よろしくお願いいたします。